

天理図書館蔵『狂言六義』の原因・理由を表す条件句：ホドニとニヨッテを中心に

松尾, 弘徳
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/9370>

出版情報：語文研究. 89, pp.1-13, 2000-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

天理図書館蔵『狂言六義』の原因・理由を表す条件句

——ホドニとニヨッテを中心に——

松尾弘徳

0. はじめに

・わかい時かせいだによって、今楽をする (虎明本「さいほう」)
・検校の坊、平家の由来が聞きたいほどに (fodoni)、あらあら略してお語りあれ (天草本平家物語 巻一)

等の、原因・理由を表す条件表現を構成する句(以下単に「条件句」と呼ぶことがある)の中世・近世における様相については、これまでに多くの論考がある。とりわけ小林千草氏に詳細な研究があり、小林千草 1977 は近世における変遷を、また小林千草 1973 は、『玉塵抄』等の抄物資料・『天草版イソホ物語』等のキリシタン資料・『虎明本』等の狂言資料をもとに、中世における史の変遷を考察しておられる。氏は中世から近世に至る過程の中で起こったホドニとニヨッテの勢力交替現象を述べるに際して、17世紀半ばに書写された虎明本・虎清本と18世紀末に書写された虎寛本との比較を大きな手がかりとされた。しかしながら、大蔵流の虎明本・虎清本と同時期の筆録とされる、和泉流最古の狂言台本である天理図書館蔵『狂言六義』(以下通称に従い天理本と呼ぶ)の後半部の条件句の様相はむしろ虎寛本に近く、虎明本・虎清本筆録時には既にニヨッテの伸長はかなり進んでいたと考えられるのである。

1. 天理本における原因・理由を表す条件句の様相

天理本は和泉流の祖本とされる狂言台本で、『狂言六義』上・下及び連歌・謡等を収めた抜書の三冊からなる。筆録年代については書誌学的方面からの研究により、寛永・正保ころとされる^(註1)。なお、これは虎明本(寛永十九(1642)年書写)・虎清本(正保三(1646)年書写)の筆録時期とはほぼ一致する。とすると、言語事象についても天理本は虎明本・虎清本等と似た様相を呈するのだろうか。

天理本の原因・理由を表す条件句を調査した結果、ホドニ・ニヨッテ・バ・ニ・トコロデ・アイダ・ニヨリ・ニツイテ・ユエニ・カラ・モノという11の形式が見られた。次頁の表1は天理本本文の条件句の様相を纏めたものである。また、後件が省略されているもの、及び抜書部分の条件句については考察対象から除外した。^(註3)

表1を見ると、天理本ではホドニが他を圧倒しており、次いで使用率の高いニ

ヨッテとあわせるとこの2つの条件句で全体の八割を占めていることがわかる。^(注4)

(表1) 天理本本文の条件句

ホドニ	667 (62.5)
ニヨッテ	227 (21.4)
バ	85 (8.0)
ニ	37 (3.5)
トコロデ	15 (1.4)
アイダ	14 (1.3)
ニヨリ	7 (0.7)
ニツイテ	5 (0.5)
ユエニ	2 (0.2)
カラ	1 (0.1)
モノ	1 (0.1)
計	1061

() 内は天理本
における条件句の
使用率 (%)

次に大蔵流狂言台本の条件句を見てみる。下の表2は小林千草1973に示された虎明本・虎清本・虎寛本の条件句の様相を私に纏めたものである。氏はこの調査をもとに、虎明本・虎清本から虎寛本に至る百五十年の間にホドニとニヨッテの勢力交替現象が起きたことを指摘された。

表1と表2を比べてみると、天理本と虎明本・虎清本の様相はよく似ている。

(表2) 大蔵流諸台本の条件句

	虎明本 (1642)	虎清本 (1646)	虎寛本 (1792)
ホドニ	1750 (72.1)	89 (67.4)	741 (33.0)
ニヨッテ	252 (10.4)	17 (12.9)	1204 (53.7)
バ	167 (6.9)	13 (9.8)	178 (7.9)
トコロデ	53 (2.1)	5 (3.8)	52 (2.3)
アイダ	65 (2.7)	1 (0.8)	22 (1.0)
ニヨリ	14 (0.6)	1 (0.8)	11 (0.5)
ユエニ	8 (0.3)	0	3 (0.1)
ニツイテ	2 (0.1)	0	0
テ (デ)	106 (4.4)	6 (4.5)	33 (1.5)
その他	6 (0.3)	0	2 (0.1)
総計	2428 (99.9)	132 (100.0)	2246 (100.0)

() 内は各台本における条件句の使用率 (%)

この三本はほぼ同時期に成立した台本であることから、この結果は頷けるところである。しかし、天理本の様相を詳細に調査すると、このように結論を簡単には下せなくなる。次節では、この点について述べてゆきたい。

2. 上・下巻における条件句の様相

第1節で述べたように、天理本は上下二巻からなる。下の表3は前掲表1を上巻に分けて示したものである。表3を見ると、天理本の上巻と下巻では条件句の様相が異なることがわかる。上巻で70%以上の高使用率であったホドニは、下巻になると使用率が最も高いことには変わらないが、その勢力は大きく落ち、使用率は45%弱になっている。そして、下巻ではホドニにかわりニヨッテの使用率が33%弱と大きく伸び、ホドニと伯仲するほどの高使用率である。

つまり、天理本は上下巻で条件句の様相を異にし、上巻が虎明・虎清本と酷似した様相を示しているのに対し、下巻は虎明・虎清本と虎寛本の間段階といえる様相を示していると考えられる。

(表3) 天理本上巻・下巻の条件句の状況

	上巻	下巻
ホドニ	492 (73.7)	174 (44.8)
ニヨッテ	98 (14.7)	126 (32.4)
バ	37 (5.5)	47 (12.1)
ニ	18 (2.7)	19 (4.9)
トコロデ	9 (1.3)	6 (1.5)
アイダ	7 (1.0)	7 (1.8)
ニヨリ	4 (0.6)	3 (0.8)
ニツイテ	3 (0.4)	2 (0.5)
ユエニ	0	2 (0.5)
カラ	0	1 (0.3)
モノ	0	1 (0.3)
計	668	388

() 内は各巻での使用率 (%)

天理本がその内部に問題を孕んでいることに関しては、これまでに筆跡面及び言語事象面からの指摘がある。

まず、筆跡面に関しては小林賢次・田口和夫両氏の報告があげられよう。両氏は天理本に筆跡の変化が認められることから筆録者が一人でないことを指摘された。その概要を次頁に示したが、小林賢次氏は表中のAとBの筆跡は同一人物の手によるもの、さらにはCとDの筆跡は別の同一人物の手になるものとされ、A

B・C・Dのそれぞれ内部における筆跡の相違は筆録時期の違い等によるものと考えられているようである。^(注5)とすると、天理本は下巻91と92を境に筆録者を異にしていることになる。

A	上巻 1「餅さけ」～ 上巻 120「やるこ」及び 下巻 1「末ひろかり」～ 下巻 69「太子手鉢」	
B	下巻 70「酸辛」～ 下巻 91「雷」	肉太でやや乱雑な筆遣いで、「サラバ」を「更ば」と記す等、用字法の上でもAとはやや異なる
C	下巻 92「黄精」～ 下巻 94「岩橋」	「御」「出」「や」「む」の字形に特徴
D	下巻 95「かち栗」～ 下巻 102「祢宜山伏」	「を」「也」の字形に特徴

続いて言語事象面について述べたい。天理本の言語事象に内部差の存することは蜂谷 1977・大倉 1987・小林賢次 1990 等が指摘している。以下諸氏の指摘を略述する。

蜂谷 1977 では仮定条件表現「ナラバ」「タラバ」に対する「ナラ」「タラ」が下巻にしか現れないことが、大倉 1987 では「ゴザアル」と「ゴザル」に関して「ゴザアル」が上巻 61 番以降激減することが指摘されている。そして、小林賢次 1990 では①大倉 1987 において指摘された「ゴザアル」の激減する箇所が上巻 61 番ではなく上巻 81 番以降であること②「サラバ」と「ソレナラバ」に関して「ソレナラバ」が下巻以降多用されること③「マラスル」と「マスル」に関して「マスル」が下巻 70 番以降多用されること、の三点が指摘されている。

以上述べたように言語事象面に関しては、諸氏の指摘された内部差の境界は必ずしも上巻と下巻ではなく、さらにその境界も一致してはいない。よって条件句の内部差の境界についても上巻と下巻ではないという可能性が考えられる。この言語事象面及び先述した筆跡面の指摘を踏まえた上で、原因・理由を表す条件句の内部差の境界を考えることとする。

次頁の表 4 は上下巻を前後半で 4 つに分けてイ・ロ・ハ・ニとしたもの、また表 5 は上巻は四十番ずつに、また下巻は先述した筆跡の相違箇所毎に区切って、それぞれ a～g としホドニとニヨッテの用例数を示したものである。この二つの表を見ると、原因・理由を表す条件句の様相は上巻から下巻へと進むにつれ有意差がはっきりするようと思われる。

このように、天理本は上下巻で条件句の様相を異にし、上巻が虎明本・虎清本と酷似した様相を示しているのに対し、下巻はより虎寛本に近い、虎明本・虎清

本と虎寛本の間段階ともいえる様相を示していると考えられる。そこで、以後は対象をホドニとニヨッテの二つの条件句に絞って考察を進めたい。

(表4)

	曲番	ホドニ	ニヨッテ
上巻	イ 1～60	212 (5.4)	39
	ロ 61～120	281 (4.8)	59
下巻	ハ 1～51	81 (2.1)	38
	ニ 52～102	93 (1.0)	88

- ・「ナラ」「タラ」が現れるのはハ以降
- ・「ゴザアル」はロ以降激減

(表5)

	曲番	ホドニ	ニヨッテ
上巻	a 1～40	118 (4.4)	27
	b 41～80	216 (7.2)	30
	c 81～120	158 (3.9)	41
下巻	d 1～69	108 (1.7)	64
	e 70～91	47 (1.0)	46
	f 92～94	5 (2.5)	2
	g 95～102	14 (1.0)	14

- ・「ゴザアル」はc以降激減
- ・「ソレナラバ」はd以降多用される
- ・「マスル」はe以降多用される

() 内はニヨッテを1としたときのホドニの比率

3. 上接語・後件との関係から

これまでは専ら量的な面からホドニとニヨッテを比較してきたが、次にホドニとニヨッテを質的な面から眺めたい。本節では、小林千草氏の研究に倣って条件表現の構成する前件・後件に着目し、前件については条件句に上接する語を、そして後件についてはその種類を考察する。

まず、上接語についてであるが、次頁の表6はホドニ・ニヨッテの上接語を上巻に分けて調べたものである。

表6をみると、上巻ではあらゆる上接語の面でホドニがニヨッテを圧倒している。が、下巻になると様相は一変して、「動詞・ちゃ・ぬ」に下接するホドニとニヨッテの用例数は拮抗していて、「形容詞・た・尊敬語」に下接するニヨッテの用例数は、ホドニの用例数を上回っている。しかし、上下巻通じて推量・意志を表す「う・うずる」や打消推量・打消意志を表す「まい・まじい」といった助動詞群にニヨッテが下接した例はないことがわかる。

次に条件句と後件の関係を考える。後件の種類は、小林千草1973に従い、現代語の「から」と「ので」の違いを考察した永野1952の分類を参考に、後句末の表現に着目して推量、見解、意志、命令・依頼、疑問、事実の叙述の6種類に分け

(表6) ホドニ・ニヨッテと上接語との関係

上接語	上巻		下巻	
	ホドニ	ニヨッテ	ホドニ	ニヨッテ
形容詞	28	10	9	16
動詞	178	43	60	45
ちゃ	49	10	24	19
な	3	2	0	3
なる	0	7	0	1
たる	0	0	0	1
つる	1	0	0	0
た	68	13	12	18
尊敬(るる・らるるせらるる含む)	13	3	2	6
丁寧(まする・候まする含む)	24	2	9	3
ぬ	45	7	14	15
げな	2	0	0	1
なんだ	1	1	0	1
まい	13	0	6	0
まじい	1	0	0	0
う	56	0	37	0
うずる	2	0	0	0
たい	3	0	0	0

た。用例を以下にあげる。

<推量>

- ・角よりしては、いくつなるらんと云た時、二九と言われたは、角から、十八間目じゃによって、二九と言われた物であらふ (下五十一「二九一八」)
- ・死んだ鴈じやほどに、当たらぬ事は御ざるまひ (上百三「鴈磔」)

<見解>

- ・頼ふだ人が有徳なによって、此壺は、泉かと思ふ (下四十一「桶の酒」)

<意志>

- ・出家したれ共、学問はなし、齋非時くるゝ者もないによって、上方へ上て、似合、小庵の留守居もせう (下七十五「宗八」)
- ・久しく参らぬほどに、先案内を乞をう (上二十二「腰祈」)

<命令・依頼>

- ・是は正身のわかめじゃによって、お御覧じやれ (下七十一「若和布」)
- ・只今、楽しうなる様を、教ゆるほどに、耳を澄まひて、聞け (上七十九「福の神」)

<疑問>

- ・論じたるによって、取り返さうと仰せらるる、事か (上三十五「毘沙門連歌」)

<事実の叙述>

- ・見乞と云は、人の物を見て、乞うても取やうな、物じゃによって、見乞と云 (上六十「身乞のさつくわ」)
- ・又いつものやうに、酒に酔ふて参つて、わらわに、往ねと申ほどに、戻りました (上八十五「貫聳」)

以上の様な分類をニヨッテに関して行った結果が下の表7である。

(表7) ニヨッテの後件の種類

天理本	上巻	下巻
推量	2	8
見解	0	7
意志	2	11
命令・依頼	2	3
疑問	1	0
事実の叙述	91	97
計	98	126

この表から、上巻ではニヨッテの後件のほとんど全てが事実の叙述であったのに対し、下巻では推量・意志・見解を後件にとる割合が増していることがわかる。

次に、ホドニについては小林千草 1973・同 1977 に

「ホドニは後件が命令・依頼を表す場合に限ってニヨッテの侵略を押し返して(注6)いた」

という指摘がある。そこで、

- ・その昆布を、某、買い取らうほどに、捨て、太刀を持て (上二十九「昆布売」)
- ・身共も、鶯を出しておいたほどに、そなたも、太刀を出しておきやれ (下七十三「鶯」)

のように天理本で後件が命令・依頼であるホドニを見ると、上巻は 143 例で、これは上巻のホドニ全体の 29%にあたる。これに対し、下巻では 73 例で、これは下

巻のホドニ全体の 42%にあたり、下巻では上巻に比べホドニが後件に命令・依頼をとる割合が高くなっている。

また、上接語と後件との関係を考えてみると、

- ・あまり、気詰りにも、あらふほどに、又ちと、親のもとへ行て、心を、ほうじて、煩はぬやうにも、召されい (上六十七「引括」)
- ・是を、舞ひませうほどに、囁させられい (上七十五「地蔵舞」)
- ・一杯飲うで、往のうほどに、酒蔵の、戸を開けい (下十五「伯母が酒」)
- ・これほどな、手柄は、あるまいほどに、此体を、一節うたふて、往なふ (下十六「ちぎりき」)
- ・こなたは、あれが知るまいほどに、後ろから、抱き付かせられい (下十九「腥物」)

・包丁は身共がしてやらうほどに、此経を讀ふでたもれ (下七十五「宗八」) のようにホドニの上接語が推量・意志の助動詞である場合には後件に命令・依頼がくることが多い。このような構文形式のものは上巻には 39 例で、これは後件が命令・依頼である 143 例の 27%にあたり、下巻になると 27 例で同じく 73 例の 37%を占めている。

以上の調査結果からホドニ・ニヨッテの上接語と後件に関して次の二点がいえよう。

- ①ニヨッテは下巻において大きく勢力を伸ばしたが、上接語に推量・意志の助動詞をとることはなく、専らホドニがその役割を果たした
- ②ニヨッテの後件が命令・依頼であることは上下巻通じて少なく、下巻で利用率の落ちたホドニは後件が命令・依頼の場合にのみ、その勢力を保っていた

これらは小林千草 1973 において虎明本・虎清本と虎寛本との比較により得られた結論と一致する。とするとホドニとニヨッテの勢力交替現象が天理本内部において起こっているということになる。

4. 内部差が示すもの

天理本が虎明本・虎清本と同時期の筆録ならば、虎明本・虎清本における原因・理由を表す条件句の様相よりも国語史的に見て後の時代の様相の反映と考えられる天理本後半部の条件句の様相の方が筆録時の様相に近いものであると言える。また、

- ・互いに飽きも飽かれもせず、身上ならぬから、両の合点でやる暇じゃ (下八十五「箕被」)
- ・米はなふて、酒は飲まずにえ御ざらぬもの、ならうやうが御ざらぬ (下八十「千鳥」)

さらには後件が省略されたものではあるが、

・シテ（住持） いよいよお知りやった寺は、ないのと云

アト（施主） 御ざらぬからじゃと云

（下七八「啼尼」）

のように、小林千草 1973 において虎明本・虎清本には見られないことが報告されている新しい条件句であるカラ・モノが下巻にしか見られないこともその傍証となりうるのではないか。

以上のような内部差が存在する以上、その発生理由について考える必要もあろう。内部差の発生要因としては、筆録者の相違・筆録者の筆録意識の変化・筆録時期の相違・天理本の詞章が筋書き的で未整理である為など、いくつかの可能性を想定してはいるが、未だ明確な回答は見出せてはいない。しかし、いずれにしても天理本後半部の様相は、当代の様相の反映であると思われる。小林賢次氏は「言語資料として天理本を扱う際には、やはり、それぞれの筆跡の相違が、さまざまな言語的な相違を伴うことに注意をする必要があり、それらの区別は、やはり意味を持っていると考えられる」（小林賢次 1999, p73）と述べられた。この筆録者の相違は天理本を考える上で大きな問題である。ただ、第 3 節後半部で述べたように条件句の様相にみられる内部差の境界は筆跡の相違箇所と一致しているとは思われず、筆跡を等しくする上巻 1～下巻 69 中においても内部差が認められる以上、一人の筆録者の筆録意識の問題についても併せて考える必要がある。筆録者が狂言詞章、とりわけ条件句の選択にどれほどの影響を及ぼすのかということに関しては、今後の課題として考察を進めてゆきたい。

5. まとめと今後の課題

天理本の原因・理由を表す条件句を調査した結果、次の 2 点が明らかとなった。

①天理本上巻はホドニが全条件句の 7 割を占め優勢であるのに対し、下巻ではホドニとニヨッテの使用率が拮抗している。

②ホドニは下巻において使用率が落ちるが、以下の場合には下巻に至ってもニヨッテに取って代わられることはない。ちなみに、これらイ・ロの条件は結びつきが強いと考えられる。

イ. 条件句の上接語が推量・意志・希望の助動詞である場合

ロ. 後件の種類が命令・依頼である場合

以上の二点は、小林千草 1973 等で指摘されたホドニからニヨッテへの勢力交替現象が、天理本内部において見られることを示している。

17 世紀半ばに筆録された虎明本・虎清本ではホドニが圧倒的に優勢であるが、18 世紀末筆録の虎寛本ではニヨッテが優勢となっており、このことによってこの百五十年間にホドニとニヨッテの勢力が交替したとされてきた。しかしながら、虎明本・虎清本とほぼ同時期の筆録と思われる天理本の条件句を調査すると、後

半部においてはホドニ・ニヨッテの勢力が拮抗している。これは、より新しい時代の様相の反映であり、筆録当時ホドニの衰退・ニヨッテの伸長はかなり進んでいたと思われることを改めて強調しておきたい。

なお、原因・理由を表す条件句については史的変遷だけでなく、構文論的見地に立った考察も行う必要がある。また、天理本の筆録にも関わるとされる和泉家古本、あるいは版本狂言記等、大蔵流以外の狂言台本の条件句の様相との比較も行わねばならないが、これらは全て今後の課題としたい。

これまで狂言台本は大蔵流の台本が中心資料とされてきた。しかし、本稿で考察したように、天理本をも比較の対象とすることで、大蔵流諸本の比較（例えば虎明本と虎寛本等）から国語史的事実として推定されてきた事象に再考の余地が生じることもあろう。筆録者が未確定ではあるが、当時の言語状況を探る手がかりとして天理本の国語資料的価値は決して軽んずることはできないと考える。

注1 各研究について些か述べると、池田 1967 において天理本は、「寛永年間（1624～1644）以後、山脇和泉元宜（万治二年没）又はその養子元永（正保二年没）いずれかの手になるもの」と推定された。そしてこの後、「天理本に『弥太郎』『弥衛門』の名が見え、それが正保二年（1645）に改名した大蔵虎明をさすとみられるところから、山脇元宜の晩年、正保二年執筆開始」と元宜の筆録とする北川 1976 と、『政頼』の注記に『……鳥養いっみは、さやうにはなきよし、ただ犬をよび出すとし候よしに候』という伝聞記事から、鳥養和泉から一代以上離れている者が筆者と推定し、鳥養和泉と呼ばれた可能性のあるのは元光道西か元宜道仙であり、しかも筆者が元宜・元永二代の内とすれば、元永道意の筆となる」と、元永の筆録とした田口 1987 の二説が提出されている。

- 2 テキストとして『狂言六義全注』を用い、天理図書館善本叢書『狂言六義上・下・抜書』の影印も適宜参照した。また、用例に付された下線は全て引用者によるものである。
- 3 抜書部分の条件句の様相は右の表のようになっており、上古以来用いられてきた条件句であるバの使用率が最も高い。これは、抜書部分が謡・語り・和歌・連歌を記したものであ

条件句	用例数 (%)
ホドニ	12 (9.4)
ニヨッテ	7 (5.5)
バ	80 (63.0)
ニ	14 (11.0)
アイダ	6 (4.7)
トコロデ	0
ニヨリ	1 (0.8)
ニツイテ	0
ユエニ	4 (3.1)
カラ	0
モノ	0
ユエ	1 (0.8)
ママニ	1 (0.8)
ママ	1 (0.8)
計	127 (99.9)

※条件句は天理本本文において用例数の多いものから並べている

り、早くから詞章が固定していた為と思われる。

4 用例をあげると以下の如くである。

1 ホドニ

- ・某の声と聞いたらば、定而留守を使をうほどに、作り声をして呼ばう
(上[卷]三[番]「二千石」)
- ・そちは、川狩りが上手じやほどに、ちと魚を取て、それを品に持つて出たらば、よ
かるふかと、思ふて、談合に來た (上十九「武悪」)

2 ニヨッテ

- ・今日吉日にてあるによつて、聳入致す (上十六「懷中聳」)
- ・おのれが、卑しい奴じやによつて、お冷しと云事を知らぬは (下七十二「お冷し」)

3 バ (必然確定条件を表すと思われるもの)

- ・上頭は、いつも正月の事なれば、持て上る (上一「餅酒」)
- ・はや、日数も古りて候へば、故郷、懐しい (上九十「唐相撲」)

4 ニ

- ・茶が悪いに、ぬるうて、飲まれぬ (上三十七「今神明」)
- ・殊外くたびれたに、きやつに負われて行かふ (下九十九「蝸牛」)

5 トコロデ

- ・咄をせうにも、つんぼじゃところで、ならず (上七十「見ず聞かず」)
- ・こなたの大きい目で、網を見て御ざるところで、鳥が寄らぬ (下八十「千鳥」)

6 アイダ

- ・御歌の折節にてある間、歌を一首づゝ、仕れ (上一「餅酒」)
- ・所の習ひにて、初めてのお出には、舞を舞わせらるる間、そと、所望する
(上七十三「引敷聳」)

7 ニヨリ

- ・悴の時より飲酒戒を保つにより、御酒をたべぬ (上七十五「地藏舞」)
- ・命日には、茶湯を手向け、とむらい申候、則今日が、正命日にて候により、かやう
に、茶湯を手向け申事にて候 (下十一「通円」)

8 ニツイテ

- ・物によそへてと、仰せらるゝについて、思ひ出しました (上四「文蔵」)
- ・こゝもと、連歌がはやるについて、身共も、初心講を結んで、連歌を致す(上六十
「見乞のさつくわ」)

9 ユエニ

- ・酒を参らぬやうにと存るならば、持つて参まらずまひが、参るやうにと存る故に、
持つて参つて御ざる (下七十七「酒講式」)

10 カラ

- ・互いに飽きも飽かれもせず、身上ならぬから、両の合点でやる暇じゃ
(下八十五「箕被」)

11 モノ

- ・米はなふて、酒は飲まずにえ御ざらぬもの、ならうやうが御ざらぬ
(下八十「千鳥」)

5 田口・小林両氏の推定された筆録者には相違がある。この点について簡単に述べておきたい。

田口 1995 は、小林賢次 1993a の指摘を「を」等の字体を手がかりにして補強した。さらには『古狂言台本の発達に関する書誌的研究』に影印された、三代元信道甫筆録とされる和泉家古本の抜書部分と下巻 95～102 の筆跡が一致することから、D 筆の部分は元信の手によるものとされ、上巻全体及び下巻 1～91 は山脇和泉家二代元永によって、また下巻 92・93・94 は初代元宜によって、下巻 95～102 は三代元信によって筆録された、と述べられた。

これをうけ天理本筆録者の再考を行ったのが小林賢次 1999 である。氏は更なる筆跡面の検討から筆跡 C と D は同一人の手になるものとされ「元信以前の筆録者は一人ということになる以上、伝書を筆録して元信に譲り渡す立場にあったのは、(足掛け四年しか勤めることができず早世した元永ではなく、通算三十数年勤めた)元宜以外に考えられない」(p67) と、A・B 部(天理本の大部分)の筆録者を元宜、C・D 部の筆録者を元信と推定された。この推定を整理したものが下の表である。

筆跡	天理本本文	小林賢次氏による推定	田口和夫氏による推定
A	上 1「餅さけ」～ 上120「やるこ」 下 1「末ひろかり」～ 下 69「太子手鉢」	元宜	元永
B	下 70「酸辛」～ 下 91「雷」	元宜	元永
C	下 92「黄精」～ 下 94「岩橋」	元信	元宜
D	下 95「かち栗」～ 下102「祢宜山伏」	元信	元信

- 6 このことは、申 1994 による『捷解新語』の原刊本と改修本との比較からも明らかにされている。
- 7 此島正年『国語助詞の研究—助詞史の素描—』(桜楓社、1966) は、「(接続助詞としてのカラが) 一般的に用いられるようになったのは近世以後で、しかも特に江戸語において発達した」(p215) とされ、諸概説書もほぼこの記述に一致する。ただ天理本のこのカラの用例を『狂言六義全注』は、「ごさいませんことから(さがしているのです)の意。『から』は格助詞であるが、接続助詞に近い用法」(p667) とし、接続助詞として認めるかどうかについては疑問も残る。なお、モノを条件句と認めない考え方もあろうが、『狂言六義全注』が、「この『もの』は形式名詞から転じ、『…ですから』という接続助詞的な用法になっている」(p680) とし、『狂言六義(下巻)』(三弥井書店)も、「米はないのに、酒は飲まずにすまされないのですから、支払いがうまく行くはずがありません」(p280) と訳していること、並びに『古語大辞典』(小学館)がモノを順接の確定条件を表す接続助詞として立項し、用例として「おれが大事の孫じゃもの、何しに悪う思ひませう」(歌舞伎・五道冥官)

をあげていること等を考え合わせた上でモノも条件句に含めた。

8 この点に関して、条件句の包含関係に着目した李 1998 がある。

<引用論文・参考文献>

- 池田廣司 1967『古狂言台本の発達に関する書誌的研究』風間書房
大倉浩 1987「天理本狂言六義の『ござある』」『静岡英和女学院短期大学紀要』19
北原保雄・小林賢次校注『狂言六義全注』勉誠社、1991
北川忠彦 1976『「狂言六義」解題』天理図書館善本叢書『狂言六義 上・下・抜書』八木書店
小林賢次 1990「言語資料としての天理本『狂言六義』—ゴザアル・ゴザル、マラスル・マ
スル、サラバ・ソレナラバの分布から—」『近代語研究』第八集、武蔵野書院
—— 1993a「天理本『狂言六義』の成立とその詞章—「本文」と「抜書」との関係を中心
に—」『小松英雄博士退官記念日本語学論集』三省堂
—— 1993b「言語資料としての和泉家古本『六議』—天理本『狂言六義』との比較をと
おして—」『近代語研究』第九集
—— 1999「天理本『狂言六義』の筆録者再考」『日本語研究（東京都立大学）』19
小林千草 1973「中世口語における原因・理由を表す条件句」『国語学』94
—— 1977「サカイのゆくえ—近世上方語におけるサカイとその周辺—」『近代語研究』
第五集
—— 1994「中世のことばと資料」武蔵野書院（上記二論文再録、引用は再録版によっ
た）
申忠均 1994『「捷解新語」の改修—原因・理由表現を中心として—』『語文研究』78
田口和夫 1987『岩波講座 能・狂言Ⅴ 狂言の世界』岩波書店
—— 1995『天理本狂言六義（下巻）解説』三弥井書店
永野賢 1952『「から」と「ので」はどう違うか』『国語と国文学』29-2
蜂谷清人 1977「狂言古本における仮定表現『ならば』『たらば』とその周辺』『成蹊国文』
10
李淑姫 1998「大蔵虎明本狂言集の原因・理由を表す接続形式について—その体系化のため
に—」『筑波日本語研究』第3号

〔付記〕

本稿は、国語学会平成 10 年度秋季大会（九州大学）における口頭発表に加筆修正を施し、纏めたものである。発表の席上及び発表後に小林賢次先生はじめ多くの方々には有益な御教示を賜った。記して感謝申し上げる。

なお、本研究は、日本学術振興会の研究助成及び平成 12 年度文部省科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

（まつお ひろのり 九州大学大学院博士後期課程）